
攻略フラグを回避せよ！

熊胡麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

攻略フラグを回避せよ！

【Nコード】

N5123W

【作者名】

熊胡麻

【あらすじ】

私は女でした。オタクでした。腐女子でした。だけど、転生やらトリップやら憑依やらその他諸々のテンプレを体験したいと願ったことは一度もないつつうのおおおお！

不本意な形でBLEゲームの攻略対象キャラに憑依してしまった女性の異世界生活物語

短編から連載になった小説ですので、短編にも同タイトルの作品がございます。シリーズとして一まとめにしております。一話は短

編と同じ内容ですのでご理解ください。

第一話 人生のローガンを立てましょう

私はオタクだ。

漫画もゲームもアニメも大好きだし、私はしないがコスプレも見てる分には大好きだ。

そして、まあ世間一般で腐女子とカテゴリされる人間でもある。私が腐女子になった切欠は割愛する。私がオタクで腐女子のカテゴリに存在する人間であることが分かればおkだ。

そしてここからが重要だ。

愚痴めいたものになるかもしれない。というか愚痴だ。魂の叫びだ。割と本気で声にだして絶叫したいけど今は朝だし、人様のお宅だし、この家に私以外誰もいないのは知ってるけど近隣住民に心配されて家にこられるのは勘弁願いたい。今の私は朝っぱらから絶叫なんてするキャラじゃないから、言い訳に苦労しそうだし。

さて、ゲームステータスで言うところの混乱状態に陥ってる私のために思い返してみよう。

朝、小鳥（たぶんスズメ？）の鳴き声で目覚めたところはいい。むしろ爽快な朝の目覚めって感じで好印象。ここまでは良かったん

だ。

私がここで体の違和感に、周囲の変貌に気づかなかっただら、清々しい普通の朝だったんだ。

「…？ …は、何…これっ」

すらりと伸びた、細くしなやかな腕。女の私以上に白く、けれど力強い”男”の腕。それが一番最初に飛び込んできた、明確な変化だった。節くれだった手もすらりと伸びた足も低く艶のある美声も、女でもやしだった私にはなかったものだ。とても分かりやすい異常事態だった。

「私の体じゃない。…って、誰の体よ！」

今まで横になっていたベッドから飛び起きるようにして、私は視界に入った姿見の前につけよった。

鏡に映ったのは、無駄に美形な男。私の驚愕の表情をそのまま真似るように、鏡の中の男も目を見開いている。いや、真似てるんじゃない。鏡の中の男が、今の私…らしい。

そして鏡をまじまじと見続けていた私は、気づいてしまった。この体の本来の持ち主に気づいてしまったのだ。

回想終了。そしてエマージェンシー。

いまだに私はこの体の持ち主の予想を覆せないでいる。うん、ああ、叫びたい。

のっそりと鏡の前に座り込んでいた体を動かし、ふらふらと私はベッドに歩み寄る。先ほどは慌ててたから気づかなかったけど、部屋の中も大分違う。

むしろ私の汚部屋と比べたらこの部屋が可哀想だ。裁判沙汰になるかもしれない。

ぼすんとうつ伏せでベッドに倒れこみ、ふかふかの白い枕に顔を押し付けて準備完了だ。

私はオタクだ。そして腐女子だ。二次創作だってバッチコイ。男同士の恋愛マジぶまいですな人間だ。もちろん男女の恋愛だってぶまいです。漫画もゲームもアニメも大好きだし、ネット小説だって日課のごとく巡ってる。転生もトリップも憑依やアンチだってお手のもの。オリ主最強は書き方による。そんな人間でした。

だけど私は主張したい。

転生もトリップも憑依も最強もその他諸々全部、私が何の被害を被らない第三者の立場で読み手として感情移入し楽しむのが好きなのであって、決して私が実際に転生やらトリップやらその他諸々を体験したいってことじゃないことをだ。ついでに、

「BLゲームの攻略対象キャラに憑依トリップとか考えたこともないってえのおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

まさしく叫ばなきゃやってらんねえって心境だ。うん、知りたくなかった心境だな。そしてふかふか枕GJ。結構大声で叫んだけど、外に聞こえるほどの大きさではなくなっただと思う。枕さんマジかけえっす。

「...とりあえず現状把握と、今がいつなのか。そして本当にゲームの中の世界またはそれに準ずる世界なのかを確認しないかね」

夢才子は望み薄だ。あまりにも感触がリアルすぎる。匂いや床を歩いたときの感触まである夢なんてないはずだ。ならば私がすべきは事態を把握することに尽きる。もっかい寝て戻るなんて楽観的な考えは捨てるべきだ。ネットのテンプレが実際適用されるかも分らないし、本当の私の体がどうなったかも分からない。そしてこのまま呆然と無為に過ごすのも時間の無駄だ。

「さしあたってはこの家の探索と、この体のスペック確認かしら。身長差がありすぎて転ぶなんて真似したくないし。…どじっこ美形なんてフラグは絶対回避しなきゃ…」

本当にここがゲームの中の、もしくはそれに準ずる世界なら男性同士の恋愛もあるかもしれないし。何が切欠でそういった対象になっちゃうかも分からないんだから回避できるフラグは回避しておく。

そして目標としては、

「…目指せリアルBL傍観…っ！」

なってしまったものは仕方ない。ならば、うん。この世界でも第三者として、隠れ腐女子人生を謳歌しとこうじゃないか。目指せ楽しい人生。ストレスは溜め込まないに限る。たぶんネットなんてあるわけないし、ストレス発散法は読書かBL観察しかなさそうだ。そして手軽さで言えば後者が断然手軽。

私が憑依しちゃったのは攻略対象キャラだ。明るい人生設計のための最終目標としてスローガンを掲げておこう。

「目指せ攻略対象脱退。目指せ脇役男子Eってね」

第一話 人生のスローガンを立てましょう（後書き）

短編から連載へ。

不定期更新＆拙い書き方かもしれませんがよろしくお願ひします。

第二話 現状把握から始めましょう

「よしつと、収穫はこんなもんかな」

彼の家をくまなく探し続けて、大体三時間後。私は朝起きた寝室に戻り、ベッドの上に倒れこんだ。思いのほか疲れてしまったけど、それ以上の収穫も見つかった。

一つは私の中に彼の記憶があったこと。これは予想外だったけど、それ以上に頼もしい収穫だ。多分彼が自我を形成し始めただろう幼少期の記憶から今、私が彼になってしまいう前日の晩までの記憶が、確かに私の中にあった。

ところどころ穴抜けの部分もあったけど、そこは多分彼自身も忘れていたところだと思うから気にしなくても大丈夫だと思う。今の体の中には私の記憶と彼の記憶、二つの記憶があり、その記憶を私という精神がまとめている状態らしい。うまく説明できないけど、儲けものだと考えて受け入れよう。

もう一つはカレンダー。オウヴァル16プランタン4-5。彼の記憶に従って読み解くと、オウヴァルが年号でプランタンが春、季節を表していた。そして4-5は月日。オウヴァル16年春の4月5日……という風に読むらしい。ちなみに曜日は現代日本のカレンダーと同じ場所に書かれていた。今日はサムデイ……土曜日だ。この世界も土日と祝日が休みらしくて、外は賑やかな喧騒に包まれている。こういった部分は何処の世界も一緒らしい。

原作の開始年はオウヴァル17だったから、今は原作の一年前なのだろう。彼の記憶があつて助かった。……無かつたら絶対このカレンダーを読み解くなんてできなかったと思う。だって字、見たこともないグニャグニャとミミズがのたくったような奴だし。

彼の記憶を私の精神が纏めているからだろうか。本棚に置かれて

いた本を試しに読んでみたけど、見たこともないミミズ文字だつていうのに問題なく読めた。後はその文字を書けるかどうかなんだけど……字再試してみなきゃ分からないか。

倒れていたベッドから起き上がって寝室を出る。出て直ぐの廊下を向かって左が彼の私室だ。

私は彼の私室に入り、本や紙の束が積み重なる大きな机を回り込んで未使用の羊皮紙を棚から取り出した。赤いふかふかのソファに座って、彼の机に向かう。忘れないように書き留めなければいけない。

羊皮紙に書き込むのは原作のことだ。彼の記憶を見た限り、この世界に日本語もしくはそれに準ずる言語は存在しなかった。どれだけ私以外の人間が読み解こうとしても、取っ掛かりや法則がなければ見当はずれの解読になるだろう。私以外には読めない暗号、そして私が手軽に読んで確認できる暗号といったらもう、自ずと選択肢は限られる。

机に置いてあった羽ペンをインクに浸し、机に落ちないように構えた。この世界はヨーロッパの中世をモチーフにした世界だ。当然ボールペンなんて便利なものはない。彼の記憶では日常的に慣れ親しんだものだが、この体を動かしているのは私だ。最初から綺麗に書けることは期待しないで、練習の意味も込めて書こう。

この世界の元となつてしていると私が仮定した原作の名前は「Un
スーヴェラン アティロン
sovereign attendant」だ。主な略称はすべろん。
フランス語で魅力的な支配者という意味らしい。年齢制限有りの1
8禁PCゲームで、実力派のスタッフ陣が送り出した異色作。実験
的な要素がふんだんに織り交ぜられた作品で、脅威のディスク三枚

組みというスペック殺しな一品だ。私も他のゲーム消さないと、カククしてまともにプレイできなかった。

……補足の意味も込めて、この世界の簡単な地理も書いておこうかな。

私が今いるここはアヴニール王国。エスポワール大陸の沿岸部に位置する、魔法と武力が発達した大国だ。政権は絶対王政であり、王が政治の全権限を持っている。王位継承は世襲制ではなく、アヴニール王国が誇る騎士と魔法使い。その知識と資格を持っている者なら、誰でも王になれるのがアヴニール王国最大の特徴だろう。

選出方法は一対一の勝ち抜き形式。騎士と魔法使い混合で戦い、最後に勝ち残った人が次の王たる資格を得ることになる。もちろん勝つてすぐ王に襲名するわけではないけど、変わった制度だと感じた。他の国でこんな型破りの方法を探ってる国はない。

だけどその制度が功を奏したのか、この大陸でアヴニール王国は最強無敗の国として存在している。

そんなアヴニール王国で最大の規模を持つブラヴール学園が、すべろんの舞台だ。

物語は主人公が二年生になるときから始まる。ブラヴール学園は全四年制の学園で、二年生のとき学科選定が行事として組み込まれている。その学科選定を転機として、主人公の物語は開始するのだ。騎士科と魔法科、二つの学科の適正をはかって、より適正の高い方へと振り分けられるこの学科選定はブラヴール学園の伝統行事だ。その選定結果は強制ではないが、ほとんどの生徒は振り分けられた学科を選択する。適正の低かった方の学科を選択する生徒は稀だ。

そしてこの行事、主人公にとっては攻略できるキャラクターが決定するだーいじな行事っというわけだ。攻略人数は騎士科と魔法科

それぞれに五人ずついて、どちらの科にも出現条件有りのシークレットキャラが一人いる。ストーリーは主人公の卒業まで続くため、攻略中の上級生キャラが卒業した後は休日にデートとかしたりして攻略していく一風変わったシステムになっている。

EDは攻略キャラクターにつき三つ。別名攻めルート受けルート、リバルルートだ。

そう、このゲームは主人公の選択肢で受け攻めが変わるのだ。ぶっちゃけ私はリバルルートが一番攻略しづらかった。ストーリーの前半部分で受け選択肢と攻め選択肢の割合が五分五分であることがリバルルート突入の条件なんだけど、その変の匙加減がマジで難しかった。何度間違えて受け&攻めルートのほうに突入してしまったことやら……。

ちなみにルート名はそのままの意味だ。受けルートは主人公がされる役で、攻めルートはする役。リバはその両方とも。

私しか読める人はいないって分かってても、流石に直接的な表現は控えたほうがいいだろう。ちゃんとオブラートに包んで書いているだろうか……不安だ。

自然と唸りながら、私は羽ペンを握りなおした。騎士科と魔法科の特色についても書いておこう。

まずは騎士科。騎士科の生徒はそれぞれ最初に、自分が極めたいと思う武器を選択するらしい。それを元に使い方や戦略の立て方などを学ぶようだ。

例えば弓を選んだ場合、弓の扱い方を始め、どのような場面で役立つかどのような場面で足手まといになるか。その武器のメリットやデメリットを説明し、それでも極めたいと思ったら詳しい扱い方を学ぶといった感じだ。中には何ていうか、そう、とてもユニーク

な武器を選ぶ人もいて……本当にもう、私の中の騎士像を粉々に打ち碎かんばかりの勢いだった。彼の記憶の中にモーニングスターを選んだ人もいて、それを見た瞬間かな。私の中の騎士像ががりと変わったよ。

本来の私の体よりほつつそい体で、鎖の先についているバスケットボール大の棘つき鉄球を、自身の頭上で勢いよく回転させる姿は圧巻を通り越して怖かった。周囲も記憶の中の彼も怖がっていたから、多分この世界でも異常な光景だったんだろう。安心した。あれが常識なんだったら、私多分死ぬ。

思い出してしまった記憶に脱力して、私はペンを置いた。魔法科の特色が書いてないけど、今度にしよう。今はどうにも、書く気が無くなってしまった。

手と手を組んで腕を前方に伸ばし、ぐっと体を伸ばす。慣れない羽ペンでの作業に体が緊張していたらしく、鈍い折れるような音が体中のそこかしこで鳴った。視界に入る腕は細くとも男性のそれで、女のものではない。……その事実が辛い。

彼は何処にいつてしまったのだろうか。私はどうなってしまうているのだろうか。不安は、上げてしまえばきりが無い。

「私は……違うか。これからは、僕……だね。気をつけなきゃ……。後は、口調と歩き方と……仕草？ 他には何を変える必要がある？」

私は僕になる。違和感なんて与えてはいけない。私は彼ではないから彼を演じる必要はないけど、それでも男性らしくしなければ駄目だと思う。わたし……僕は元々女で、完璧に男を演じれるとは思わないけど、しないよりする方が良い。

私が僕になるために必要なことは、女性的な動作を無くすこと。

男性的な仕草ができなくても、女性的な動作がないだけで違和感は大分無くなる……はずだ。時間に余裕は無い。彼の記憶によると明日から始業式だから、実質今日と明日で形にするしかない。ハードスケジュールにもほどがある。

それを考えると、彼に憑依したことは不幸中の幸いと断言しても良いだろう。彼以外のキャラクターに憑依していた場合、僕はその攻略対象の性格を演じる必要があった。彼、アストル・アームが攻略対象の中で唯一の自宅通学生であり、尚且つ徹底的なまでの人嫌いであることが、僕の負担を極端に減らしてくれたのだ。

他の攻略対象は学園寮に住んでいる。一人部屋だからといって油断して廊下に出た瞬間、他の生徒に遭遇する可能性があるのだ。寮では休まる時間もないだろう。そして何より、他の攻略対象は多少なりとも人づき合いがある。その人の性格を演じると演じないのとは、ボロが出る確率もストレスの量も大幅に違うことは想像に難くない。アストルの記憶を確認してみても、彼が誰かと私的な会話をしたことは皆無だった。アストルの詳しい性格を知っている人は誰もいないだろう。それが例えアストルと一年を共にした担任であつても、だ。ソレがどれほど異常なことか、僕は知っている。

……その異常こそが、僕の最大の幸福つてのが皮肉だよな。

「でもま、これを利用しない手はないよね。劇的！アストル君大改ぞー……あ、口調変え忘れてるや。気をつけないとね、じゃなくて……気をつけないとな」

やっぱり、使い慣れた口調を無意識に使ってしまうな。……人前で実践して強引に変えてみるか？ 髪の毛も切りたいし、ちょうど良いかも。

僕は長い前髪を摘みながら、彼の記憶で周囲の地理を確認する。歩いて数分もしない場所に美容院があった。多分、行けるだろう。

ソファから立ち上がり、僕は背伸びをした。今はこの世界での一般的な寝巻きのままだから、外に出るなら着替えなきゃいけない。ドレッサーは寝室にあるので、また部屋を移動しないと。僕は机を来たときと同じように迂回し、アストルの寝室に向かった。

今朝、容姿を確認した姿見の横に設置された大きめのドレッサーを開く。

……少ないな。いや、確かにアストルは学校と食料の買出しぐらいにしか外出していなかったみたいだから仕方ないのかもしれないが……、これは流石に少なすぎだろう。

思わず口をへの字口にしながら、僕は脳内メモに服の購入も書き加えた。ゲーム内で彼は一般生徒に不細工だの不潔だのと散々影で罵られていたが、例え初期状態が冴えなくても攻略対象。初めてアストルの素顔スチルを見たときの衝撃を、僕はきつと一生忘れない。

異様に長い前髪とゲーム内でつけてた、だっっさい伊達眼鏡で隠れているだけでアストルは絶世のという言葉をつけても構わないくらい的美形なのだ。すべろんでも貴重な眼鏡要員にして隠れた素顔は美形というテンプレをこなしたアストルに、憑依という形ではいえ関わられたのだ。

これはもう、……着飾らせるしかないだろう。いや着飾らせなくてもいいだろうけど、ソコはソレだ。本人に拘りが無いなら、格好もソレらしくあるべきだと思う。今の僕はアストルじゃないから人嫌いでいる理由もないし、オールおkだろ。

ぐつと拳を一回力強く握った後、いざつとばかりにボタンを手にかかけ……ふとそこで僕は、今までまったく意識していなかった重大な障害があることを思い出してしまった。

「……あ、あー……。すっかり忘れてた……。そうだよ。すべらんってBLEゲームだし、うん。別に不思議なことじゃないっていうか、僕がすっかりさん過ぎたっていうか……」

無意味に弁解交じりの独り言を呟きながら、僕は眉を寄せた。この体で生活するのに、絶対避けて通れない障害をすっかり忘れていたのだ。手をかけたままのボタンよりも下、ちょうど太ももの付け根の辺りを見る。男性と女性の外見的な差異の最たる部分。その存在をまったく意識していなかった辺り、僕って意外と大物かもしれない。

「……見てない。見てないぞー。僕は見てない。長さとか形とか色とかどっちよりとかそんなの見てない見てない」

嘘です。がっちりしっかり見えます。でもでも、慣れなきやいけないし、シヨウガナイヨネ？

思いがけないハプニング(?)を乗り越えつつ、ファンタジーな構造の服に苦戦しつつ着替えた僕は、腰袋に紙幣と貨幣を入れて準備を完了させた。家の鍵は首からリボンでさげ、僕は両開きの巨大な玄関から外に繰り出した。

第二話 現状把握から始めましょう（後書き）

次は街中探索&外見改革のお話です

第三話 改革前のハプニングと友人フラグ

人の賑わう異国情緒漂う町並み。街道を歩く人々はカラフルな髪を風になびかせ、店先を覗き込んだり、立ち止まって世間話に花を咲かせている。

「……………すごいな……………」

アストルの家から外に飛び出した僕の目に入ったのは、そんな光景だった。

思わず感嘆の声を上げながら、街道に沿って足を動かす。物珍しさにきよるきよると辺りを見渡した。

やっぱり目につくのは道を歩く人の髪の色や服装だった。ピンクや水色など、本当に色とりどり。人工毛や染色のような不自然さもまったくくない。これ……………見る分には目に楽しいけど、自分の髪がピンクとかは無理だな。アストルの髪の色は黒に近い深緑だったから本当に良かった。

完全に目元まで覆ってしまう自分の前髪を一房つまみ、眺める。脳裏に思い描く見慣れた自分の髪とこの髪に、これといった違いは見当たらない。……………むしろ女のころの髪より艶とか手触りとか、色々こつちのほうが……………。いやいや、そんな馬鹿な。女として多少なりともトリートメントとかに気を配っていた私の髪より、不規則で自堕落な生活を送っていたアストルの髪のほうが綺麗じゃねとか……………絶対認めねえ。

……………うん、やめよう。これ以上考えちゃうと僕、これから行く美容院で丸坊主にしてくださいとか言いかねない。丸坊主は駄目だ。一時の感情でそんなことしたら僕は生き恥を晒すことになってしま

う。イケメンの丸坊主とか誰得だよ。何をどう間違っても俺得にはならない。落ち着け僕。びーくーる、Be coolだ私。

吸って、吐いて、軽い深呼吸を二度ほど繰り返す。早く美容院に急ごう。間違っても僕が丸坊主にしてくださいとか言いださないうち。

もつと街並みを観察したい気持ちを抑えながら、早足に急ぐ。ちやんと内股にならないよう気をつけながらだ。

一本の大きな街道から、左右に枝分かれした道を右に曲がって直ぐの場所に目的地が見えてきた。考え事をしてる間に随分と近くまで来ていたらしい。

目的の場所である美容院は赤いレンガで造られた二階建ての建物だった。ハサミの絵が大きく描かれた木製の看板を上に掲げていて分かりやすい。店の扉は開いていて風で閉まらないよう重しで抑えてあり、店内の様子が見えるようになってる。店の中からはハサミの切る音と水の音、楽しそうな喋り声などがここまで漏れ聞こえてくる。

「おーっし、いざ」

「ふざけんじゃねえぞゴラアアア!!」

店内の陽気なししゃべり声に後押しされるように、さあ入ろうと足を一步踏み出したところで僕は思わず止まってしまった。店内から男の怒声やガラスの割れる音が聞こえる。きゃあ、や、うわっなどの声も混じり、活気づいていた店内は一瞬で静まり返ってしまった。

「何してくれてんだよ! アア!？」

「な、ええ?! お、俺はお客さんの言うとおりに切っただけ、ですが……」

「うつせえ！ テメエが笑いやがるからいけねえんだろっが！ ぶっ殺してやるっ！」

のろのろと体を動かして怒鳴る男は、状況がまだ把握できてないらしい。巡回の騎士とか来たら、間違いなく捕まるのは自分の方なのにな。

わざとらしく口角を吊り上げ、少し大げさな仕草で肩を竦めて見せる。視線を大通りの野次馬に向けながら、僕は優しく男に忠告してあげた。

「あつれ？ そんなこと宣言して大丈夫なのか？ こんなに大勢の人がいる前で、無関係の僕を、よりにもよって殺すだつて？ 君は随分と大胆らしい。巡回の騎士様が到着されたら、どちらが悪いのか、周囲に聞けば直ぐ分かる。なーんにもしていない僕と、その僕に突然飛び掛ってきた君。子供でも分かる。僕をぶち殺すだなんて騒ぐよりも前に、することがあるんじゃないのか？」

にやにやと意地悪く顔が歪んでるのが分かる。僕つてもしかして、性格悪いのかも。男は震えるように大きな体を揺らすと、辺りを忙しなく見回して青ざめる。ようやく周囲の様子と、自分の現状の危うさを理解したらしい。

「つぐ、おお、覚えて……あ、や、忘れやがれええええ！ つくつそおおおおおおおおお……！！！」

吼えるように叫んで、男は細い路地に走っていった。というか、うん。随分と切実な捨て台詞だったな……。結構挑発したから、お決まりの台詞を言うかと思っただけ……、自分の格好を覚えられてるほうが嫌だったらしい。まあ無数の金髪縦ロール姿なんて覚

えられたくないか。

走り去っていった彼の背中は怒りと空しさ、悲しいなどが混ざった複雑なものに溢れていて……切欠を作り、挑発までしたことに少しだけ罪悪感を覚えた。

……せめて、冥福を祈っておこうか。

「あー……、ちょっといいか？」

「へ？」

両手を合わせて黙祷を捧げていたら、先ほど男と争っていた青年が遠慮がちに話しかけてきた。予想していなかったとは、間抜けな声を出してしまった。不覚。

青年はまだ去る気配の無い野次馬を見回した後、ちよいちよいと右手で手招いた。元々お店に用もあつたし、招かれるまま店内に入る。

青年は扉が閉まらないよう置いていた重しを取り除いた後、扉を閉めて僕の方を向き直り、おもむろに両手を顔の前で勢いよく合わせた。ぱちんと合わさった両手が大きな音を立てる。

「助かった！ ありがとう！」

「……え？ あの、僕が特に何かした覚えは無いんだが」

拜むような形で手を合わせ、頭を下げた青年に慌てた。身に覚えの無いことで感謝されても困惑することしかできない。僕がやったことといえば、男を挑発するように大笑いしたことくらいだ。困惑する僕に、青年は笑いながら顔を上げた。

「いやさー、お前がああのタイミングで笑ってくれんかったら、絶対口だけじゃ終わらんかったと思うんだ。そうすつと、あれだ。さっきアイツが割りやがった瓶以上の被害が出て……俺がお袋にどやさ

れてまうってー結果が……」

青年を改めて見る。ふんわりと明るい茶色の髪。二本の黒いピンで前髪を右に止め、後ろは寝癖みたいにはねている。若干垂れた青い目は青年の外見を穏やかそうに見せているが、本人の性格は違わらしい。どちらかといえば活発な、悪戯っ子みたいだ。

「まあ、お前が大爆笑してくれたお陰さんで、俺もお袋にどやされん！」

「そうだねえ……どやさないわけえ……無あいでしょうがツツ！
こんの馬鹿息子ツツ！！」

がつつという硬い音と共に、青年の頭が消えた。……いや、訂正音と共に青年が前のめりにしゃがみ込んで、視界から一瞬消えた。頭を両手で押さえて声もなく呻いてる青年の後ろで、恰幅のいい女性が拳を握り仁王立ちしていた。

「仮にも客に怒鳴って手え出そうとする馬鹿が何処にいるってんだい！ さっきのは客も悪かったがアンタも悪かったよ。客の注文素直に聞くからこうなるんだ。結果が見えてるんだから、煽てるなり何なりして注文内容を変更させるくらいいな！ まったく、アタシの息子とは思えないくらい手ぬるいな！」

「ッツいったあああ！！ 何も殴ることないだろ！ あ、嘘ですごめんすんません。やから拳握らんでお願いお袋の拳骨は本気でしゃれにならんのだから、死ぬ。死なんでも馬鹿になる。お袋もこれ以上息子が馬鹿になるとか駄目やね？ ね？ やから許して勘弁して反省してるから」

あんまりな説教を繰り広げた女性に一瞬反抗しかけて、直ぐに平

謝りしだした。うづくまつてた場所で両手をついて頭を下げて綺麗な土下座を披露する。あ、ここにも土下座の文化ってあるんだ。土下座した青年を放置して女性がこっちを見た。なんだろう。僕も何か言われるのかな。

「すまないねお兄さん、巻き込みまつて。お兄さんのお陰で助かったよ。お礼といっでは何だけど……お兄さん、髪を切る予定はないかい？」

「あります。元々、髪の毛を切るつもりでここまで来てたので」

「そうかい！ そいつは丁度良かった！ さっきのお礼だ、タダで良いよ」

「……良いんですか？ 大したことしてませんよ？」

「いーのいーの！ あたしが気にしなくて良いってんだから、気にしなくて良いよ。ラッキーぐらいに思っときな」

あれぐらいでタダとか、良いのだろうか。……良いって言うてくれているんだし、ありがたく受け取るのかな。せっかくの好意だし、タダだし。うん、ラッキー。

「ほら、そんなところでグズグズしてないでとっと起きな！ ああお兄さん、あたしは他のお客さんを切ってる途中だから切れないけど、変わりにこの馬鹿が切るけど良いかい？」

「……流石に、縦ロールは勘弁してほしいんですが」

むしろそれって嫌がらせではないだろうか。女性に言われて土下

座の体制から起き上がった青年は、僕の言葉にシヨックを受けていた。がーんと言う効果音が聞こえてきそうな顔で涙目になってる。ちよつと可愛い。が、流石に自分が縦ロールを味わうのは勘弁願いたい。お礼どころか嫌がらせだ。

「ああ、それなら大丈夫だよ。腕は確かだ。……さっきの客は、運がなかったねえ。自分の注文した髪型が、まさか自分の髪質と相性最悪なんて思いもしなかったんだろつよ」

僕の心配は杞憂だと笑ったあと、女性は客を待たせているからと奥の方へ。玄関には立ち上がった青年と、僕が残された。

「あーつと、不安かも知れんけど大丈夫だから。さっきの客みたいなこと、早々無いつてか俺も初めての体験やつたし。やから、えーつと、……頼りないかもやけど、俺で良い、かな？」

僕が不安かもつて言う彼のほうがよつぽど不安そうで、思わず顔がゆるむ。可愛い。絶対この人受けた。妙な確信を抱きながら僕は頷いた。

「良いよ、大丈夫。……けど、縦ロールは勘弁だからな？」

「……！ せ、せんせん！ 絶対せん！ 任せとつて！ 絶対カツコよう切るから！ それじゃ切る前に髪の毛ぬらすからこつち来てくれ」

おどけて笑うと、彼はぶんぶんと激しく頷いた。にこにこ笑った彼の顔は少し火照つて、赤い。先導するように奥へと歩く彼についていくと、数歩もしないうちに振り向いた。

「つと、その前に名前聞いてもえーかな？ いや変な意味と違って、
恩人さんを何時までもお前呼ばわりとか心苦しいし、ちゃんと俺の
名前も言うし、えっとだからまったく変な意味はのうて」

「アストルだよ」

「ふへ？」

何だか逆に変な意味に捉えてくれと言わんばかりに、変な意味は
ないと強調する彼に頬が緩む。今の僕の名前。アストル。人にこの
名前で自己紹介するの、変な感じだな。

「アストル・アーム。僕の名前。……で、君の名前は？」

「アストル……アストルな、オツケー。覚えた。俺の名前はエガリ
テ。エガリテ・アミだ。改めて、よろしく！」

数回僕の名前を呟いて頷くと、彼は、エガリテはそう言って笑っ
た。

差し出された手を握り返す。

もしかしたら、うん。この世界最初の友人ができるかもしれない。

「こちらこそ、よろしく」

友達ゲット目指して、まずは会話から初めてみようかな。

第三話 改革前のハプニングと友人フラグ（後書き）

誤字、脱字等あったらお気軽に掲示板で指摘したってくださいな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5123w/>

攻略フラグを回避せよ！

2011年10月9日15時59分発行